

福祉功労者が顕彰されました

◎日立市社会福祉協議会会長顕彰
 平成二十六年十一月五日、日立市社会福祉協議会の「ふくしのつどい」が、ゆうゆう十王Jホールに於いて開催され、多年にわたり地域福祉活動を実践されて、社会福祉の発展に寄与された功労者が顕彰されました。

会瀬学区からは、左記の三名の方々が顕彰されました。

●社会福祉活動協力援護者(在職十年以上)
 小澤 勝雄(野外環境整備活動)
 笠原トモ子(ふれあい配食サービス、ふれあい健康クラブ)
 松原 文江(ふれあい配食サービス、ふれあい健康クラブ、サロン活動)

※顕彰された三名の方々は、現在も引き続き会瀬学区の社会福祉活動を実践されております。

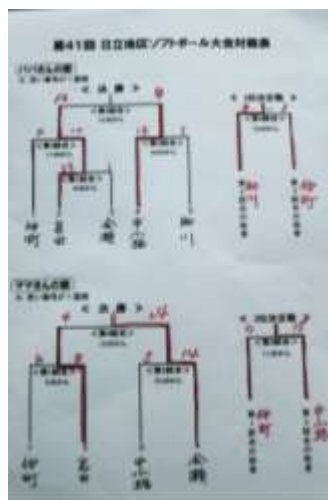
おおせ秋まつり

平成26年10月19日(日)実施



第41回 日立地区ソフトボール大会

期日：平成26年11月23日(日)
 場所：市立助川小学校グラウンド
 参加学区：助川・仲町・宮田・中小路・会瀬
 主催：日立体育振興会
 PFA中心に練習を行い見事
 ママさんチーム 優勝
 パパさんチーム 一回戦敗退



ママさんV2おめでとうございます!

ふるさと会瀬から 正月行事あれこれ

「年の初めのためしとて終わりなき世のめでたさを松竹たてて 門ごとに 祝う今日こそたのしけれ」「一月一日」と名付けられた小学校祝日の式歌で、元日に登校した児童が式の中で歌った。帰りに紅白の餅をもらった年代は70後半か80代か。「もういくつ寝るとお正月 お正月には 凧あげて こまをまわして あそびましょう はやく来い来い お正月」明治時代に作られた言文一致の代表的な唱歌であり、今でも歌われている。

師走になると新しい年の神様(歳徳神としとくじん)を迎える準備が日本中で行われる習慣が定着している。神霊を迎えるため大掃除で家の内外をきれいにし、我が家の目じるしとして(依り代という)門松をたてる。(現在では輪飾りといって小さな松の枝に御幣をはさんだ小さな稲の輪を通した飾りを門松替わりとしている)。御幣や榊(さかき)も目印の一つである。

神に願いを込めた正月飾りを玄関先にかけておくが、願いは家内安全・五穀豊穡・大漁だが、時勢からか豊かな生活を渴望する小判などが付いているのが多い。神様が落ちて着く場所は神棚であり神の占有場所であるから縄を張って目印にした。それが注連縄(しめなわ)で標識の意味であることから輪注連・ごぼう注連・海老注連などがつかわれるようになった。

神体に代わるものとして鏡に見せた二段の鏡餅が神棚に供えられる。神の恵みに感謝してお供え物は神社では米・酒・餅・魚・鳥・海草・野菜・果実・塩・水などであるが一般家庭では酒・餅であろうか。大晦日もあわただしく過ぎ紅白歌合戦終了近くになると村の鎮守である会瀬鹿島神社へと初詣の人が続く。宮司の太鼓の音で神の降臨が告げられ鈴の音が境内に響く中に青年会の甘酒を振る舞う声も聞こえる。

初日の出を迎えようと若者たちが会瀬の浜に来る。雲がない水平線から日の出を見るのは年間を通して多くはないが今年はどうだろうか。家庭では一年の安寧を願ってか、最初の水(若水)を水道であっても汲み、お湯を沸かす。近頃は若水で風呂を沸かし家族みんなで朝ぶろを楽しむ家庭も多い。昔は年の神を迎えたので清潔な新しい衣類を身につけたものだった。物の無い時代には衣類を新しいものに変えるのは正月だったのだ。正月に新しい足袋が与えられた記憶がある。今でも元日の朝、親が改まった衣服を着用(例として父親がふだん着ない和服を着用)する家庭があるに違いない。

家族そろって新年のあいさつを交わし食事になるが、本来は神に供えた飲食物(神饌しんせん)を食する(直会なおり)ことで神と人が同じ酒を飲み、同じものを食べることである。朝から酒を飲むことが公然とできるのは正月だけである。お神酒を年の神と一緒に飲むのだから・・・山の幸海の幸をいっしょに煮て神体に似せた餅をいれた雑煮があるが、関西での丸餅は鏡餅からきているので納得する。関東や会瀬ではお供えする鏡餅以外は箱でもちをのぼし「のし餅」とし、後に切り餅とするから長方形の餅が普通である。

子どもにとっては、早くこいこいお正月であった。うまいものが食べられるし、お年玉(年賜)として金銭や物が入るし、学校は休みで遊べるから。遊びといっても期間限定の気がする。凧揚げ・コマ回し・羽根つき・毬つき・すごろく・カルタ・百人一首・トランプ・十二支あそび・福笑い等々。年の初めらしい遊びは家族みんなが笑う福わらいや、「邪気をはね(羽根)のける」という縁起をかついた羽根つきで江戸時代から女子に親しまれていた。

年の神が我が家にいるのは元日から15日間、1月15日は神を送る日。その日の朝に門松を外し、神を祭った飾り物も外しみんなで持ち寄り焼いた。民間では「どんどやき」と言い竹を数本立てその中で焼いた。竹が焼けて音を出すことから「どんどやき」と言われた。会瀬でも空き地で行われていたが火災の危険もあり、各家庭でつましく実施されていた。

都市化が進んだ結果、飾り物も縁起物もごみとして扱われるようになってしまった。25年前この事態を憂いた当時、会瀬市民運動推進会会長であった小室節雄氏の呼びかけで「浜の焚きあげ祭」が誕生した。25年継続し地域の行事として定着した結果、市の文化遺産として登録される運びになっている。